



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自然栽培の世界観とケアの質的研究 : 季刊書籍『自然栽培』の内容分析から
Author(s)	福島, 令佳
Citation	研究論集, 20, 73 (左) -90 (左)
Issue Date	2021-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.20.l73
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80783
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_rjgshhs_20_p073-090_l.pdf



自然栽培の世界観とケアの質的研究

—— 季刊書籍『自然栽培』の内容分析から ——

福 島 令 佳

要 旨

自然栽培で農福連携を行うことで、障害者と支援者のケア関係が良好になることが明らかにされつつある。自然栽培では、栽培植物への愛情やわが身になって世話することが重要視されており、「農作業」という言葉では表現しきれないケアの要素をもつ営みがある。福祉現場のケアに良好な影響を与える自然栽培の世界観とはどのようなものなのか。本稿では、自然栽培でリンゴ栽培を成功させた木村秋則氏が監修する季刊書籍『自然栽培』を分析対象とする。そこにおいて、栽培植物、その他の生き物や考え方に関する記述を抽出し、その世界観が福祉現場におけるケアに与える可能性を考察する。分析結果から、栽培には「わが身になって考える」事や「愛情」等が必要という自然栽培独特の世界観が明らかになった。その世界観が生み出す栽培植物へのケアの在り方が、福祉現場に良好なケアの関係性をもたらす可能性があることが示唆された。

1 はじめに

近年、農業の人手不足と福祉の就労先開拓の必要性の高まりという背景から、厚生労働省と農林水産省による障害者を農業の貴重な担い手として位置づける農福連携が推進される動きがある（厚生労働省・農林水産省 2017）。

農福連携は主体の違いから分類がなされる。社会福祉法人などから、施設外就労という形で、障害者が農家で農作業のお手伝いをする形や社会福祉法人自らが農業を行う形、農業法人を別途立ち上げ、併設させる動き等である（吉田 2020）。

そのような中、障害者の就労に関する先行研究には、一般就労に近づけるための商品開発、経営や戦略的なマネジメントに関するものが多かった（池田ら 2014；池田 2018, 2019）。

しかし、一方で障害者の就労の場におけるケアの在り方を問われるような調査結果が明らか

になっている。例えば、国立重度知的障害者総合支援施設のぞみの園研究部が行った「都道府県・政令指定都市・中核都市における生活介護・就労継続支援B型事業所の評価についての実態調査」によって、生活介護、就労継続支援B型事業所に対する苦情の内容等が明らかになった。特に、就労継続支援B型事業所に対する利用者や家族等からの苦情のうち、支援に関することが63パーセントであり、具体的には「職員に暴言を吐かれる」といった事業所や職員の対応、支援の質やサービス内容等というものであった（岡田ら 2019）。

農福連携が推進されてはいるが、それが行われる主要な障害者の就労の現場では、ケアの在り方に関する課題が山積していると言えよう。

しかし、そのような状況にありながら、自然栽培で農福連携を行う現場には好事例が多い（吉田ら 2020）。

自然栽培とは、化学肥料と合成農薬を使わずに生物の力を使って栽培する農業とされている（杉山 2013）。さらに、木村秋則氏（以下木村氏）は、栽培植物への愛情やわが身になって世話することを重要視しており（木村 2007, 2009）、「農作業」という言葉では表現しきれないケアの要素をもつ営みがある。自然栽培を行う農福連携に関する研究も希少だが、自然栽培とケアに焦点を当てた先行研究はさらに希少であると言える。そのような中、自然栽培で農福連携を行う場における障害者と支援者の良好なケアに関する先行研究がある。福島は、土壌微生物などの「栽培植物以外の生き物も活かす自然栽培の世界観が障害を強みに変える機会をもたらしている。それは、職員が利用者をアクターとして認めることに繋がり、それが非対称的なケアの関係性にも影響する」（福島 2020: 24）と述べている。この研究では、良好なケアに影響を与えるものとして自然栽培の世界観が取り上げられている。しかし、福島もこの研究の課題として指摘しているように、自然栽培の世界観はいくつかのカテゴリとして、断片的にしか捉えられていない。そのため、本稿では、より体系的に自然栽培の世界観を捉えるために、木村氏が監修する書籍『自然栽培』を分析対象とする。福祉現場のケアに影響を与える自然栽培の世界観とはどのようなものなのか。栽培植物、その他の生き物や考え方に関する記述を抽出し、その世界観から福祉現場におけるケアに与える可能性を考察する。

2 研究方法

2-1 分析対象

分析対象は、木村氏が監修する季刊書籍『自然栽培』である。「自然」と「栽培」という、相反したものの、「栽培」を人の営みとして、両者をもう一度、つないでいくというのがこの書籍の発刊目的である（『自然栽培』編集部 2014）。

2014年に発刊されてから、2019年に休刊するまで20冊が刊行された。本稿ではこの20冊を分析対象とする。『自然栽培』という名の季刊書籍ではあるが、この季刊書籍の特徴として、

土、食、自立など多様なテーマがある。取り上げられる人物も農家だけではなく、医師、造園家、料理研究家等異業種も多い。より、体系的に複数の視点による自然栽培の世界観を分析するためにもこのような特徴は有効である。

2-2 内容分析の手順

本稿は、クリッペンドルフ（クリッペンドルフ 1989）の内容分析の手法を参考に、季刊書籍『自然栽培』の内容分析を行った。分析手順は以下のとおりである。分析対象とした季刊書籍『自然栽培』を繰り返し精読し、自然栽培の世界観の主軸となる概念を明らかにするために、分析対象となる記述に関して、栽培植物や他の生き物との関わりや栽培に関する考え方を表すセンテンスやパラグラフを要約したものを抽出した。次に、意味内容の類似性に従って分類し、その分類を忠実に反映したものを小カテゴリとした。さらに、意味内容を検討し、大カテゴリとした。分析過程においては、分析対象としたセンテンスやパラグラフの文脈の意味が適切に捉えられているか、かつ妥当であるかを社会福祉専門領域の教育者1名と共に複数回確認した。

そして、自然栽培とケアを扱った先行研究（福島 2020）ですでに明らかにされているいくつかの概念と照合しながら、未だそこでは明らかにされていない新たな概念を探っていった。また、本稿で用いるケアとは、広くケアの可能性を探る目的から、介護技術や相談援助技術といった専門的な営みに限局せず、「注視、気遣い、労苦、葛藤、そして愛情」（岡野 2012：151）や世話といった広い意味をさす。

データの記載に関しては、文責者ではなく、発言した人物の名前（出てくる頻度の高い木村氏のみ名字のみの記載）、巻号を①～⑳と表示し、その後にページ数を記載した。また、データとした『自然栽培』の出典は巻末に他の文献と共に記載した。

3 結果

大カテゴリと小カテゴリの一覧は、87 ページから 88 ページに記載した。

3-1 大カテゴリ；「当事者の視点を持つ」

小カテゴリ；「わが身になって考える」、「野菜の気持ちを想像する」

木村氏が栽培方法を説明する際に、頻繁に出てくるのが、わが身になって考えるというものである。

「もしも私がリンゴの木だったらと置き換えてみる」（木村①11）、「みなさんはいつも湿っている下着を着たいですか、作物も人と同じで、ずっと湿っている土は嫌」（木村①56）、「野菜の気持ちになるっていうのもすごくわかりやすい。経験がなくても、野菜がどうしてほしいかは、

自分に置き換えることでわかる、悩んだときに一番すっと入ってくる」(木村④110)、「みかんの樹はどうなりたいのか、そのためにはどんな環境を整えたらいいのかという視点に立つ必要がある」(岩間由奈①45)。この他にも、同様の記述が11個(木村①51, 木村①61, 木村①62, 木村④58, 木村⑤66, 木村⑦67, 木村⑪81, 佐伯康人⑫52, 木村⑫77, 木村⑫78, 木村⑲18)あり、合計で15個の記述があった。「わが身になって考える」という小カテゴリとした。

わが身になって考えることで、具体的な野菜の気持ちが想像できる。実際に野菜の気持ちに関する以下のような記述もあった。

「食べる分をとって、種子を保存して翌年必ず撒いてあげるのが私の役目、ごまが一番喜ぶことじゃないかなあって」(鈴木香純⑮81)、「葉脈に倣って選定すると果樹は肥料無しでものびのび育つことが出来てよろこぶはず」(木村①63)。

この他にも、同様の記述が1つ(木村⑥63)あった。この「野菜の気持ちを想像する」という小カテゴリは合計で3つの記述があった。

これらから、「当事者の視点に立つ」を大カテゴリとした。

3-2 大カテゴリ；「主体性の尊重」

小カテゴリ；「植物の主体的な決定」、
「植物の主体的な治癒」、
「植物の主体的な成長」

無肥料・無農薬であるがゆえに、植物は、人間が主体の管理する対象ではなく、主体的に決定、治癒、成長する存在として、以下のように記述されている。

「植物の主体的な成長」という小カテゴリは、「18年間一度も花を咲かせなかったサクランボが満開になった。私には、切られると思ったサクランボの木たちが、満身の力を込めて花を咲かせたように思える」(木村③65)、こうした植物の主体性に対して、「植物には植物の時間がある、それを耐えて待っていたのが素晴らしい」(佐治晴夫⑮8)、「私たちが手を入れるのは草刈と道の整備、剪定くらい、あとは木が一生懸命に生きていくのを黙って見守るだけ」(赤羽貴美子⑮75)という記述もあった。この小カテゴリは、他にも7つ(岡本よりたか④15, 木村⑤64, 木村⑦63, 木村⑦64, 高田宏臣⑲14, 池田成志⑮87, 高田宏臣⑳35)あり、合計で10個の記述があった。

「植物の主体的な決定」という小カテゴリは、「草は芽を出すタイミングなどの戦略をすべて自分で決めている」(稲垣栄洋③67)、「タネはどうしたら、自分たちが子孫を残していけるのかを遥か昔から考えている、その土地を知り尽くしている、タネは育った土を記憶する」(木村④55)、「農業は人為だけど、ふさわしい環境を選ぶのは植物自身」(ホン・リョソック⑥49)というものであった。他にも同様の記述が2つ(木村①12, 編集部⑮49)あり、合計で5つの記述があった。

「植物の主体的な治癒」という小カテゴリは、「少しの黒星病ならリンゴの木が自分で治癒する」(木村⑩75)、「病気になったところを木が自ら葉っぱに穴を開けて落としたあと」(木村⑩11)の2つの記述があった。

これらから、「主体性の尊重」という大カテゴリとした。

3-3 大カテゴリ；「謙虚な姿勢」

小カテゴリ；「してくれたという感覚」、「してもらおうという感覚」

分析対象を精読していく中で、よく出てきた表現が以下のように、人間以外の存在が「してくれたという感覚」、もしくは人間以外の存在に「してもらおうという感覚」だ。

「してくれたという感覚」の小カテゴリは、「リンゴの気持ちになることを教えてくれたのは山の土」(木村⑩11)、「苗が成長して固くなるとジャンボタニシは格好の除草隊、農家の良き相棒となってくれる」(田辺綾子⑩19)、「とにかくクモが多く農薬代わりに働いてくれる」(船久保栄彦⑩27)、「アブラムシは私に肥料と病害虫の関係性をはっきりと教えてくれた虫、自然栽培でイチゴを作れと促してくれた」(野中慎吾⑩38)、「お米や野菜は土の中に棲んでいる微生物がしっかり豊かにしてくれた土のエネルギーによってつくられたもの」(寺田優⑩30)、「良く育ててくれているのは品種よりも自家採取を続けているタネの力」(成澤之男⑩26)というものであった。

他にも、同様の記述が6つ(木村④60、木村⑨80、木村⑩71、野中慎吾⑩40、野中慎吾⑩41、木村⑩75)あり、合計で12個の記述があった。

「自然と対立したりするのではなく、どうしたら仲間に入れてもらえるかを考えてはどうか」(木村⑩52)という「してもらおうという感覚」の小カテゴリに関するものは、他に4つ(木村①56、木村①57、矢野智徳④50、木村⑥64)あり、合計5つであった。

これらから、「謙虚な姿勢」を大カテゴリとした。

3-4 大カテゴリ；「多様な生き物の存在意義の実感」

小カテゴリ；「多様な生き物の存在の認知と交流」、「多様な生き物たちによるケア」

自然栽培を始めたことによって、それまで見ることが出来なくなっていた虫や鳥が再び戻ってきたという記述やそのような多様な生き物との交流に関する記述が以下のように多くみられた。

小カテゴリ「多様な生き物の存在の認知と交流」に関しては、以下の記述があった。

「ゲンゴロウが戻ってきた、自然栽培によって生態系が回復しつつあるのではないか」(利根川賢一⑩21)、「ネズミ、カエル、野ウサギ、タヌキ、ハクビジン、イノシシ等の沢山の生き物

が見られる、人間以外の生き物たちは発達した本能で生態系のバランスを保っている、共生することが必要」(廣和仁⑪30),「モンシロチョウの幼虫はキャベツの外葉しか食べないのでいてもいい」(石井慎也④82),「鳥も沢山の種類が飛来する、調和を崩さない程度に場を活用させてもらう」(関野幸生⑪30),「クモを見かけるようになった、天敵が生息できる環境になってきたからかもしれない」(金子俊幸⑪31),「あらゆる虫、ヘビ、カエル、野ネズミ、野ウサギ、タヌキ、テン、カモシカ、小鳥からタカ等が大きな被害をもたらすことなく、畑に潜んでいたり、やってきて、またどこかにいったり」(木村⑪75),「川も海も必ずきれいになる、自然栽培に転換するといなくなったはずの生き物たちが戻ってくる」(木村⑫80),「カワニナ、タニシ、泥シジミなど多様な生き物が生息していた」(長沼祐弥⑬48),「動物の側があの手、この手で人間を知る努力を重ねている」(今泉吉晴⑥73),「鳥と共存している、全部取るなよと鳥に言っている」(牧田敦⑯85)。

人との交流だけではなく、以下のような多様な生き物同士の交流の記述もあった。

「ミツバチは、花の色やかたちを見分けて記憶する、ハチ同士のコミュニケーションを通じて学習していく」(佐々木正巳⑤71),「森はこの菌糸を通して会話をしている」(高田宏臣⑳28),「植物と植物はこの菌を使ってコミュニケーションをとっている」(益田航⑳82)。

他にも同様の記述が2つ(太田俊治⑪21, 番場睦夫⑪21)あり、合計で15個の記述があった。

また、小カテゴリーの「多様な生き物たちによるケア」とも言える働きや栽培植物や環境への良い作用についての以下のような記述もあった。

「自然栽培にしてからアゲハチョウが増えた、ウミネコ、ツバメの飛来が多くなった、微生物が増えて生態系が整い余分な草が減った」(成澤之男⑪20),「ジャンボタニシによる除草効果が判明、彼らの特性に合った共生を実現している」(稲本薫⑪20),「なんだかアブラムシが植物の状態を正常にするドクターにみえてくる、病虫害は植物の状態を把握することに貢献してくれる、栽培の誤りも教えてくれるパートナー、その役割は植物にとって大きなもの」(野中慎吾⑪41),「木村さんのリンゴ園にはギシギシ、タンポポ、オオバコなど10種類ほどの草が生えており、バランスが取れた状態。多様な草があることで生態系が複雑になり、寄生蜂などの天敵も棲むようになり、害虫を抑える効果もでてくる」(杉山修一⑱93),「イノシシは地中で呼吸不全を起こしているような場所の気持ち悪さを解消しようと本能的に掘っているのだと考えても不思議ではない、彼らはやみくもに掘ったりはせず、木の実生があればよけている、環境の豊かさを守る活動をしている」(高田宏臣⑳31)。

他にも同様の記述が3(長沼祐弥⑬47, 木村⑮43, 稲本薫⑰32)あり、合計で8の記述があった。

これらから、「多様な生き物の存在意義の実感」という大カテゴリとした。

3-5 大カテゴリ；「圃場における感受性の豊かさ」

小カテゴリ；「栽培植物と共生する多様な生き物の姿を美しいと感じる」，
「栽培植物と共生する多様な生き物の姿に感動する」

栽培のための観察だけではなく、圃場にいる多様な生き物の姿を美しいと認識し、感動する感性に関する以下のような記述もあった。

小カテゴリの「栽培植物と共生する多様な生き物の姿を美しいと感じる」に関しては、以下のような3つの記述があった。

「羽化したばかりのトンボのカラダ、まるで妖精のように美しい、アキアカネ年々増えている気がする、命の営みを近くで見られることが嬉しい」（鵜田美穂⑩23），「自然栽培の田んぼの魅力にメロメロ、田んぼの水中には美しい水草が繁茂、慣行栽培で嫌われ者の生き物は大切な仲間、水草たちの美しさに魅了、キクモ、アゼナ、緑色に輝く、ミゾハコベ、オモダカ、コナギ、神秘的な魅力、シャジクモ、カズノゴケなど美しい緑もある、クモのネットに朝露が並び、田んぼのあちこちで浮かび上がって見える（船久保栄彦⑩26-27），「お米は沢山の生き物たちが暮らす美しい自然栽培の田んぼからの贈り物、自然栽培の田んぼの心地よさをぜひ多くの人に体験してほしい、みんなで一緒に遊ぼう」（船久保栄彦⑩29）。

農作業の手が止まるような小カテゴリ「栽培植物と共生する多様な生き物の姿に感動する」経験は以下の記述があった。「イナゴを見るようになった、トンボが多く飛び交う、自然栽培の田んぼの上にだけツバメが旋回、つい作業の手を止めて見入ってしまう」（船久保栄彦⑩28），「地面と稲に顔を近づけ、イナゴの赤ちゃんの田んぼで生きるために生まれてきたような能力をまじまじと見て感心する、生き物の神秘おもしろい、それが田んぼでの楽しい時間」（鵜田美穂⑩22）。

これらから、「圃場における感受性の豊かさ」を大カテゴリとした。

3-6 大カテゴリ；「新たな発想」

小カテゴリ；「新しい気づき」，「新しい問い」

自然栽培に関わることによって、今まで感じたことのない新しい気づきや問いが生じているという以下のような記述があった。

小カテゴリ「新たな気づき」に関しては以下のような記述があった。

「雑草として邪魔者扱いされていた草が土をつくっていた」（木村⑩11），「自然栽培をやってわかったことはどんな生き物にも役割があること、自然から学ぶことが大事、自然と栽培をひとつにする、この一見矛盾している環境を人の手で成し遂げるのが自然栽培」（木村⑩79），「畑から島全体を考える事もできる、水はどこからきているのか、食料はまかなえるのか、自然裁

培を通じて、そんな風に考えるクセがついてしまったかも」(中村明珍①793),「耕作放棄地は農薬肥料を長年使用していない可能性があるので宝の山」(木村①53),「自然の中には他の生き物たちもいて、農業だけじゃない、もっと本質的なことが見えたり、感じられるようになってきた、暮らしの選択基準をそこにもっていると、全体がよくなるように思える」(松浦柊太郎②067),「自然栽培で大事なものは、土の本来の力を活かすこと、起きていることには意味があり排除するという考えをしない」(オ・チャンギユン⑥45),「人間にとって害虫だが自然界ではきっと何か役割があるはず」(木村①177),「畑は動物のものでもある」(今泉吉晴⑥73)。

他にも同様に2つ(木村①50, 木村①51)の記述があり、合計10個の記述があった。

小カテゴリ「新たな問い」に関しては以下のような2つの記述があった。「自然栽培はただの栽培方法ではなく、どう生きるかを問うもの、個々の生き方であり、人が他の命と関わりつつ地球でどのように生きていくかという問いかけ」(温野まき⑬4),「私たちは栄養素だけではなく、自然のエネルギーとか自然に栽培されたもののエネルギーをいただきながら生きていて、人間の活力や生命力になっていくのではないか」(寺田優⑮30)。

これらから、「新たな発想」を大カテゴリとした。

3-7 大カテゴリ；「感覚を用いた細やかで継続的な観察の習慣」

小カテゴリ；「時間をかけてよく見る、触る」、「嗅ぐ」、「舐める」、
「メッセージを感じ取る」、「測る」

無肥料・無農薬の栽培方法であるために、木村氏は「みんなそれぞれの田んぼや畑で、自然を観察して、自然から学び、少しでも良い作物を収穫するために手間をかけている」(木村②58)というように、栽培植物、他の生き物や土の状態等を観察することの重要性を主張している。それらを、時間をかけてよく見る、触ること、嗅ぐこと、舐めることやメッセージを感じ取る、測ることに関する以下のような記述がみられた。

小カテゴリの「時間をかけてよく見る、触る」に関しては以下のような記述があった。「どこに虫のタマゴがあるか、どこに病気が発生しているかを見る、観察する目を持つことがとても大事。自然はつねに変化しているので目配りが欠かせない。目と手が肥料であり農薬」(木村①52),「枯れた樹を掘り起こして根を観察するところから始まった」(岩間由奈①44),「この野菜はどういう土が合っていて、暑いのは嫌いなのか涼しいのは好きなのかを見て、考えて、育てる」(玉城卓⑧14)。他にも2つ(木村①14, 木村①51)の記述があり、合計で5つの記述があった。

小カテゴリの「嗅ぐ」に関しては以下の記述があった。「圃場の土をよく知ることからはじめましょう、自分の田んぼや畑の土のにおいをかいだことはあるか」(木村①54)。

小カテゴリの「メッセージを感じ取る」に関しては、以下のような記述があった。「植物は日々

色々な形でメッセージを送ってくれている、こうしたことに受け取る側が気付けるかどうか、話しかけると葉やツルを揺らし、応えてくれる、植物の想いが直感的にわかることもある、誰にでもわかると思う、おいでって、きゅうりに手を出したら、巻きひげを指にクルクルと巻き付けてくれた、きゅうりと通じ合った気がしてうれしくなった、作物からのメッセージがわかるようにもなるし、作物の方から天候や育て方、育てている人の体の状態まで教えてくれるようになった、本当に不思議な話だ」（伊藤秀幸⑩59-60）。

他にも、4つ（野中慎吾②107、中川吉右衛門③37、稲垣栄洋③68、木村⑦67）あり、合計で、5つの記述があった。

小カテゴリーの「舐める」に関しては、以下のような記述があった。「イチゴの苗も養分が多い顔をしていたので、育苗土を振り落して肥料入れないことで、アブラムシが完全になくなった、アブラムシが分泌した液を舐めてみるとすごく甘い」（野中慎吾⑩40）。

小カテゴリーの「測る」に関しては、「土の温度を測る」（木村①55）があった。

これらから、「感覚を用いた細やかで継続的な観察の習慣」という大カテゴリーとした。

3-8 大カテゴリー；「多様性の尊重と寛容さ」

小カテゴリー；「様々な価値を認める」「おおらかに受け入れる」

自然栽培を唯一無二のものとして、扱っていないという特徴がある。それは、以下のような小カテゴリーに表象されている。

小カテゴリー「様々な価値を認める」では、「自然栽培だけが素晴らしいものだとは言いたくない」（宮尾浩史①27）、「価値観の近い人だけで固まるのではなく、地域のコミュニティを大事にして育ていきたい」（佐々木竜也②12）、「自然栽培に取り組む人たちは他の農法を批判せずにお互いの技術を公開してみんなで仲良くなっていくという人たちが多く感じる」（木村⑨81）、「マニュアル化が出来ない、だからどこでもできるようにするには、多少の意見の違いがあっても出来るだけ知識を共有して協力する関係を築くことが大切」（本間真二郎⑮23）。

他にも同様の記述が2つ（佐藤隆司⑮39、畑匡明⑰30）あり、合計で6つの記述があった。

小カテゴリーの「おおらかに受け入れる」では、「それ自然栽培じゃないよとは言わない、試行錯誤しながら最終的に自然栽培にたどり着いてくれたらいいなと思っている」（鈴木鉄平⑨36）、「はくい式自然栽培では植物性堆肥はOKにしている。それが自然栽培でないことは百も承知、なぜ許すかという、慣行栽培農家さんも有機栽培農家さんも、一緒に未来のことを考えていくというスタンス、農業に携わるという意味ではみんな仲間」（栗木政明⑭58）、「手ごわいハダニなどは部分的に有機JAS認証の農薬を手散布したりすることもある」（上田桃子⑩48）、「有機・無農薬のものより、国産のものを、禁欲的だと続かないから、迷ったら楽しいほうに行け」（船越康弘②15）という記述があった。

また、「本当に健康な人は何を食べても元気だ、100歳を超えて元気なご老人は好きなものを食べている」(工藤和也⑬71)という記述や「実は自然栽培のものはお米ぐらいしか食べない、一般の人と同じものを食べて、タバコ吸って、お酒飲んできた」(木村⑫5)というように自然栽培農家だからと言って、体に良いものだけを食べているわけではないというおおらかさの記述もある。

他にも同様に、3つ(木村⑤64、勝田小百合⑭49、柏木大樹⑯63)の記述があり、合計で、9つの記述があった。

これらから、「多様性の尊重と寛容さ」という大カテゴリーにした。

3-9 大カテゴリー；「愛が土台」

小カテゴリー；「栽培植物や他の生き物への愛情と感謝」

「栽培植物や他の生き物への愛情から生まれる結果」

「栽培植物や他の生き物への愛情から生まれる声掛け、働きかけ」

自然栽培では、作物という商品ではなく、生き物として、栽培植物に愛情を注ぐ様子が伝わる記述が多くみられた。

小カテゴリー「栽培植物や他の生き物への愛情と感謝」では、「どれだけ愛情を持って稲に接することができるか、どうやったら稲が喜ぶかを日々考えた結果として技術がついてくる」(成澤之男①28)、「植物が育つのに必要なのは、太陽、水、土と愛情」(木村①49)、「心が先なの、心があってはじめて技術があるのかな」(木村②54)、「ごまがどんどん愛しくなってきた、ごまが見せてくれる生き様から生きることの意味や素晴らしさを感じずにいられないから」(鈴木香純⑮80)、「心も目には見えないけど、心がないと自然栽培はできない」(佐治晴夫⑯14)という記述があった。

また、自然栽培では以下のように、他の生き物への愛情や感謝も深いことが分かる記述もあった。「田んぼで出会う生き物たちが稲と共に育っていると思うとお米と同じように愛おしくてかわいい、稲と一緒に育ってくれてありがとうと言いたくなる」(鶴田美穂⑪23)、「自然栽培を継続できているのは生き物たちや稲のおかげだ」(船久保栄彦⑪29)、「アブラムシをよく見るとつぶらな瞳でまあかわいい顔をしている」(野中慎吾⑪38)、「畑に立つとそれらの生き物にありがとうと言いたくなるような風景」(木村⑪75)、「につっきハマキムシだったが、いまはかわいいと思えるほど」(木村⑪77)、「絶滅危惧種の草もよみがえり、繊細で花もきれいで本当にめんこいの。稲と共生しても問題ない。慣行栽培をしていたころは、雑草を敵対視して足で踏みつけるのも平気だったけど今はそんな心境になれない、知恵や工夫がためされ、無頓着でいられないのが自然栽培だと実感」(長沼太一・和弥③36)、「土の中の微生物は地球の掃除人と同時に生産者でもある、私は彼らにありがとうと言いたくなる」(佐藤隆司⑮39)というものである。

他にも同様に10個（木村④63, 木村⑤61, 田町まさよ⑦38, 伊藤秀幸⑩60, 泉水繁幸⑫20, 木村⑫79, 栗木政明⑭58-59, 田辺綾子⑯34, 田辺綾子⑯36, 赤羽貴美子⑱77）あり、合計で21個の記述があった。

小カテゴリ「栽培植物や他の生き物への愛情から生まれる結果」では、「愛おしく育てる生産者の野菜はおいしいし、気が短い人の畑で育つ野菜は味が落ちてしまう」（伏見照彦③82）、「子どもが自然栽培をするとうまくいく、ぶかぶかの軍手で大豆を植えたりするけど、直さずそのままにしているも育つ、僕の畑よりちゃんと育つ、たくさんトマトも実って、それも長い間実るから本当に不思議」（廣和仁③110）という記述があった。他にも同様に2つ（木村④58, 泉水繁幸⑫27）の記述があり、合計で4つの記述があった。

小カテゴリ「栽培植物や他の生き物への愛情から生まれる声掛け、働きかけ」では、「畑では、被せた土の上からトントンしてください。タネは眠っているから、目を覚まして、根を出して、しっかり育ってねという思いを伝えるため」（木村④57）、「四か所ある畑のすべてを回って全てのリンゴの樹に伝えた、今度はもっとそばにすることが出来ると思うよと、リンゴの樹はきくと喜んでくれたんじゃないかなと思う」（木村⑬14-15）、「リンゴの木に声をかけた、実らなくてもいいから、枯れないで下さいって一本一本の木にそういいながら歩いて回った」（木村⑯8）、「こちらが尽くせば応えてくれる、それを感じることが出来た時植物の生理が初めてわかる」（木村⑦67）、「収穫するときは、よく頑張ったねえ偉いねえ、うわ、あなたキレイねと一人でぶつぶつ言う。特に感動するのはタネをつくる姿になった時、あなたもわが子のために生きてきたんだねと同志に会えた気がして涙が出た」（田辺綾子⑯37）、「この子はのんびりだな、今日は元気がないな、それぞれ違うので合わせるしかない、普段話しかけないが、大寒波や豪雪の時は思わず、大丈夫かあ〜と大声で呼びかけてしまった、無事であってほしい、その一心で」（赤羽貴美子⑱75）、「私の農業の仕方は植物とコミュニケーションする事、気分が悪い時には畑に入らない、作物に影響出る」（オ・チャンギョン⑥45）という記述があった。

他にも同様に、2つ（赤羽貴美子⑱76, 編集部⑱67）の記述があり合計9つの記述があった。これらのことから、「愛情が土台」という大カテゴリとした。

3-10 大カテゴリ：「福祉と自然栽培の親和性」

小カテゴリ：「福祉と自然栽培の共通目的」「自然栽培が福祉にもたらす良きこと」

分析対象は福祉の専門誌ではないが、随所に農福連携の実践の記述がみられた。

小カテゴリ「福祉と自然栽培の共通目的」では、「自然栽培のように多様な命が存在する社会を取り戻すこと、農福連携の根本の目的も命の多様性を取り戻すこと」（濱田健司②45）、「彼らには自然を見守る仕事に適していた、働くことの概念を変え、かつ地球環境に配慮しながら仕事をつくってきた、僕らがいることで農家の人たちが助かる、農福連携というより農福一体」

(新田利昌②74) という記述があった。

小カテゴリ「自然栽培が福祉にもたらす良きこと」では、「自然栽培には千の仕事があり、障害者の能力を活かす作業がある、太陽の光を浴びて、元気になる障害者も少なくない」(佐伯康人②51)、「農薬の散布作業は障害者にとっても負担になるので使わない」(新井紀明②75)、「一人ひとり出来る仕事が違う、自然栽培らしい多様性というか」(小島友紀⑤27)という記述があった。

他にも同様に7つ(高谷裕治②9, 池田慎吾②52, 甲斐かおり⑦90, 玉城卓⑧13, 玉城卓⑧14, 加戸玲子⑫51, 佐伯康人⑫53)あり、合計10個の記述があった。

これらのことから、「福祉と自然栽培の親和性」という大カテゴリとした。

3-11 大カテゴリ；自然栽培によってケアされる営み

小カテゴリ；「自然栽培がもたらす感情」「自然栽培がもたらす回復」

「自然栽培がもたらす力」

自然栽培を始めた人、自然栽培の野菜を食べた人等自然栽培に関わった人々には、様々な感情が生まれ、回復がみられ、心身に力が湧いてくるといった変化が起きている記述が多く得られた。

小カテゴリ「自然栽培がもたらす感情」では、「生産者には、自分がやったことがそのまま返ってくる、だから自然栽培はおもしろいというのが共通している」(木村②58)、「いまは、ゆっくりやろうという気持ち」(ホン・リョソック⑥49)、「作物を信頼できるようになった」(高島和子⑩40-41)というような肯定的な感情の記述があった。

その一方で、肯定的な感情と共に無肥料・無農薬ゆえの手間による大変さ、悲しみや苦しみについても以下のような記述があった。「自然栽培を始めると悲しみと喜びがある、自然栽培は人の欲で投入し続けた化学物質や過剰な栄養を一つ一つ抜いていく作業、自然が回復し、本来の力をもって応えてくれるには時間がかかるので悲しみ苦しみがつきまとう」(栗木政明⑭68)、「大変やもん、手間はかかるけどそのぶん仕事が楽しゅうなったよ」(緒方孝行⑩38)という記述である。

この他にも同様に3つ(M.O ⑦10, 小島直子⑪35, 山田英知郎⑬86)の記述があり、合計8つの記述があった。

小カテゴリ「自然栽培がもたらす回復」では、「体調不良がなくなった」(コヤママイコ⑦5)、「蕁麻疹がほぼ完治した」(赤澤栄治⑦6)、「重い花粉症、アレルギー性鼻炎が完治」(細川敏路⑦6)といった身体的な回復の記述があった。

精神面の回復についても、「うつ状態で入院していた妻が自然栽培の食事で気力が出てきた」(大槻博⑦10)、「パニック障害の女性がはたからみてもわかるほど表情が明るくなり、毎日7錠

飲んでいた薬が必要ない日が増えた。目の障害が治らないと医者に言われていた男性は自然界の力を目の当たりにして、自分の目も治る可能性があるのではと考えるようになった、週に一度しか出られなかった利用者が毎日仕事に出られるようになり、ときには職員に収穫を指導するようになった」(甲斐かおり⑦90),「目に見えて明るくなっていく。精神障害、発達障害の人は早い。3か月から半年くらいで表情も穏やかに、全然しゃべらなかった人が冗談を言うくらいになる、みんな休まない、五感への情報量がものすごく多いから、刺激をたくさん受けて利用者もわかりやすく変わっていく」(玉城卓⑧13),「不登校で一言も発さなかった男の子が芽が出たのを見つけて初めて声を出し、笑顔も見せ学校に登校できるようになった」(木村⑧68)という記述があった。

他にも同様に11個(平野安里⑦6, 三浦真理子⑦6, 大槻博⑦6, 川代隆志⑦6, 久保公子⑦7, M.N⑦7, M.N⑦8, 仲吉京子⑦14, 石山草子⑨33, 木村⑫9, 廣和仁⑮71)の記述があり、合計18個の記述があった。

小カテゴリ「自然栽培がもたらす力」では、心身が以前より強くなり、生き方も肯定的に変化した記述があった。

「自然栽培をとおして生き方そのものを見るようになって、人生で起こる疑問も自然栽培を通じて解決できるようになりつつある」(小島友紀⑤27),「農業をしていることを心から誇りに思う」(長沼祐弥⑬49),「風邪気味になっても自力で治せるようになって風邪をひかなくなった、ストレスを乗り越えられるようになった」(森本さと美⑦5),「肌の調子が良い」(森本さと美⑦7)・落ち着いて幸せな気持ち、満たされている感じ(増田美樹⑦10),「自然栽培している人は、生き生きしている、やり方が自然の摂理に合っているからだと思う、生き物も作業する人もその米を食べる人も元気になる」(木村⑨86)という記述があった。

他にも同様に、16個(浅井朝明⑦5, 三浦真理子⑦5, 赤澤栄治⑦5, 三浦真理子⑦7, 細川俊路⑦7, 藤田美里⑦8, 森本さと美⑦8, 山口茂子⑦10, 三浦真理子⑦10, よしむら⑦10, 山口茂子⑦16, 佐野正行⑦22, 田町まさよ⑦40, 泉水繁幸⑫29, 林克彦⑬69, さとうみつろう⑮65)あり、合計22個の記述があった。

これらから、「自然栽培によってケアされる営み」という大カテゴリとした。

4 おわりに

本稿の目的は、福祉現場のケアに影響を与える自然栽培の世界観とはどのようなものなのかという問いに答えるため、季刊書籍『自然栽培』の内容分析を通じて、その世界観から福祉現場におけるケアに与える可能性を考察するというものであった。

以下に、研究方法に示した分析手順に従って、自然栽培とケアを扱った先行研究(福島2020)ですでに明らかにされているいくつかの概念と今回の結果を照合しながら分析していく。そし

て、先行研究（福島 2020）では明らかにされていない新たな概念を探っていく。

福島（2020）が、すでに示している自然栽培の世界観とケア関係への良好な影響は、以下の通りである。一つ目に、土壌微生物などの「栽培植物以外の生き物も活かす自然栽培の世界観が障害を強みに変える機会をもたらしている。それは、職員が利用者をアクターとして認めることに繋がり、それが非対称的なケアの関係性にも影響する」（福島 2020：24）と述べている。

今回の結果と照合するならば、3-4 の大カテゴリ「多様な生き物の存在意義の実感」と小カテゴリ「多様な生き物の存在の認知と交流」、「多様な生き物たちによるケア」は、「栽培植物以外の生き物も活かす自然栽培の世界観」（福島 2020：24）と重なり合う。

二つ目に、「栽培植物も主体的に自らの“生命時間”を生きているという自然栽培における栽培植物への接し方がある。Y 事業所では、それが尊重され、ケア関係に影響を与えていると言えるかもしれない」（福島 2020：24）と述べている。

それについては、3-2 の大カテゴリ「主体性の尊重」と小カテゴリ「植物の主体的な決定」、「植物の主体的な治癒」、「植物の主体的な成長」が明らかになったことで、「主体的に自らの“生命時間”を生きているという自然栽培における栽培植物への接し方」（福島 2020：24）がより具体的に示された。

ここまでは、先行研究と一致する結果を示したが、以下に新たに明らかになった自然栽培の世界観とケアに与える良好な影響の可能性について述べる。

3-1 の大カテゴリ「当事者の視点を持つ」と小カテゴリ「わが身になって考える」、「野菜の気持ち想像する」は、支援者にとっては、障害者を理解することに役立つ発想であり、ケアの質を高める可能性がある。また、同様に 3-7 の大カテゴリ「感覚を用いた細やかで継続的な観察の習慣」と特に小カテゴリの「時間をかけてよく見る」、「メッセージを感じ取る」は、言語コミュニケーションに終始してしまいがちな職員にとって、重要な感覚である。

3-9 の大カテゴリ「愛が土台」と小カテゴリ「栽培植物や他の生き物への愛情と感謝」、「栽培植物や他の生き物への愛情から生まれる結果」、「栽培植物や他の生き物への愛情から生まれる声掛け、働きかけ」については、障害者にとっては、医療・福祉のパラダイムの中で、「障害」とみなされるような「純粋な気持ち」が、栽培植物の生育に大きな影響を与えるものとして、必要とされる感覚になるかもしれない。それが、支援者と障害者という非対称的なケアの関係性の転換に影響を与える可能性があることが示唆された。

3-3 の大カテゴリ「謙虚な姿勢」と小カテゴリ「してくれたという感覚」、「してもらおうという感覚」も、支援者と障害者というケアの非対称性の改善に役立つ可能性があると言える。

3-5 の大カテゴリ「圃場における感受性の豊かさ」と小カテゴリ「栽培植物と共生する多様な生き物の姿を美しいと感じる」、「栽培植物と共生する多様な生き物の姿に感動する」、3-6 の大カテゴリ「新たな発想」と小カテゴリ「新しい気づき」、「新しい問い」、3-8 の大カテゴリ「多様性の尊重と寛容さ」と小カテゴリ「様々な価値を認める」、「おおらかに受け入れる」は、既存

のケアやケアの関係性を問い、多様な価値を受け入れる寛容さから、新たなケアを生み出す発想を与えてくれる可能性がある。

3-10 の大カテゴリ「福祉と自然栽培の親和性」と小カテゴリ「福祉と自然栽培の共通目的」「自然栽培が福祉にもたらす良きこと」、3-11 の大カテゴリ「自然栽培によってケアされる営み」と小カテゴリ「自然栽培がもたらす感情」「自然栽培がもたらす回復」「自然栽培がもたらす力」は、福祉と自然栽培という多様性を重視する共通性が、様々な形で良い変化をもたらすことを示している。

このように、今回新たに明らかになった自然栽培の世界観は、「注視、気遣い、労苦、葛藤、そして愛情」(岡野 2012: 151) や世話といったケアの要素と結びついていることが、あらためて浮き彫りになった。今後は、新たに明らかになった自然栽培の世界観を自然栽培で農福連携を行う福祉の現場の実際のケアとともに検証したい。

(ふくしま れいか・歴史地域文化学専攻)

大カテゴリ・小カテゴリ一覧表

- 3-1 大カテゴリ：「当事者の視点を持つ」
小カテゴリ：「わが身になって考える」、「野菜の気持ちを想像する」
- 3-2 大カテゴリ：「主体性の尊重」
小カテゴリ：「植物の主体的な決定」、「植物の主体的な治癒」、
「植物の主体的な成長」
- 3-3 大カテゴリ：「謙虚な姿勢」
小カテゴリ：「してくれたという感覚」、「してもらおうという感覚」
- 3-4 大カテゴリ：「多様な生き物の存在意義の実感」
小カテゴリ：「多様な生き物の存在の認知と交流」、「多様な生き物たちによるケア」
- 3-5 大カテゴリ：「圃場における感受性の豊かさ」
小カテゴリ：「栽培植物と共生する多様な生き物の姿を美しいと感じる」、
「栽培植物と共生する多様な生き物の姿に感動する」
- 3-6 大カテゴリ：「新たな発想」
小カテゴリ：「新しい気づき」、「新しい問い」
- 3-7 大カテゴリ：「感覚を用いた細やかで継続的な観察の習慣」
小カテゴリ：「時間をかけてよく見る、触る」、「嗅ぐ」、「舐める」、
「メッセージを感じ取る」、「測る」
- 3-8 大カテゴリ：「多様性の尊重と寛容さ」
小カテゴリ：「様々な価値を認める」「おおらかに受け入れる」
- 3-9 大カテゴリ：「愛が土台」

小カテゴリ：「栽培植物や他の生き物への愛情と感謝」

「栽培植物や他の生き物への愛情から生まれる結果」

「栽培植物や他の生き物への愛情から生まれる声掛け、働きかけ」

3-10 大カテゴリ：「福祉と自然栽培の親和性」

小カテゴリ：「福祉と自然栽培の共通目的」「自然栽培が福祉にもたらす良きこと」

3-11 大カテゴリ：自然栽培によってケアされる営み

小カテゴリ：「自然栽培がもたらす感情」「自然栽培がもたらす回復」

「自然栽培がもたらす力」

文献

福島令佳

2020 「“もちつもたれつ” のケア実践——自然栽培で農福連携を行うある就労継続支援 B 型事業所のエスノグラフィー——」『北海道民族学』16：14-28.

池田千登勢

2018 「授産事業の経営における障害者就労支援 B 型事業所の課題と新規事業所に有効な支援に関する研究」『福祉のまちづくり研究』20-3：21-32.

2019 「障害者就労継続支援 B 型事業所の授産品開発・販売に関する研究——質問紙調査と訪問調査による事例分析より」『日本感性工学会論文誌』18-1：1-11.

池田千登勢 高山葉子 古瀬敏

2014 「障害者福祉事業所におけるデザインマネジメント手法の研究——魅力的な商品開発を実現した就労継続支援 B 型事業所の好事例分析——」『日本感性工学論文誌』13-1：17-26.

木村秋則

2007 『自然栽培ひとすじに』創森社.

2009 『リングが教えてくれたこと』日本経済新聞出版社.

木村秋則（監修）

2014 『自然栽培』1 東邦出版.

木村秋則（監修）

2015 『自然栽培』2 東邦出版.

木村秋則（監修）

2015 『自然栽培』3 東邦出版.

木村秋則（監修）

2015 『自然栽培』4 東邦出版.

木村秋則（監修）

2015 『自然栽培』5 東邦出版.

木村秋則（監修）

2016 『自然栽培』6 東邦出版.

木村秋則（監修）

- 2016『自然栽培』7 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2016『自然栽培』8 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2016『自然栽培』9 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2017『自然栽培』10 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2017『自然栽培』11 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2017『自然栽培』12 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2017『自然栽培』13 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2018『自然栽培』14 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2018『自然栽培』15 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2018『自然栽培』16 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2018『自然栽培』17 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2019『自然栽培』18 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2019『自然栽培』19 東邦出版.
木村秋則（監修）
- 2019『自然栽培』20 東邦出版.
厚生労働省・農林水産省
- 2017『福祉分野に農作業を～支援制度などのご案内～』厚生労働省・農林水産省
クリッペンドルフ, クラウス
- 1989 三上俊治・椎野信雄・橋元良明（訳）『メッセージ分析の技法「内容分析」への招待』勁草書房.
岡田裕樹ら
- 2019「都道府県・政令指定都市・中核都市における生活介護・就労継続支援 B 型事業所の評価についての実態調査」『国立のぞみの園紀要』12：29-38.
岡野八代
- 2012『フェミニズムの政治学：ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房.
『自然栽培』編集部
- 2014「「自然」と「栽培」を百の仕事でつなぐ」『自然栽培』東邦出版, 1：2-3.
杉山修一
- 2013『すごい畑のすごい土：無農薬・無肥料・自然栽培の生態学』幻冬舎.

吉田行郷・里見喜久夫・季刊『コトノネ』編集部

2020『農福連携が農業と地域をおもしろくする』株式会社コトノネ生活.

吉田行郷

2020「これまでの農福連携, これからの農福連携」『農福連携が農業と地域をおもしろくする』株式会社コトノネ生活, 26-66.